英語学習におけるコンピタンスの評価方法の開発

森　川　美恵子

Development of English Competence Evaluation Method

Mieko MORIKAWA

評価は学習を進めてゆく上でなくてはならないものである．しかし，評価のためだけの学習といった本末転倒になりがちである．評価が単に学習結果の評定に終わらないよう，次の学習のためのステップという評価の根本に戻り，真の評価方法が開発される必要がある．

本論では，第一にコンピタンスの評価とはどんな評価であるかを従来の評価の問題点を指摘した上で述べ，第二にこれまでに開発されたコンピタンスの評価方法について例を上げながら述べたい．

コンピタンスの評価とは

1. 従来の評価の問題点

まず従来の試験問題の例を上げてみたい．

8 左側の各組の語の関係と同じ関係になるように，右側の各組の①～⑤の中に適当な英単語を入れよ．

1	good — bad	rich ——— ①		解答		
2	do ——— doing	swim ——— ②		1	①	
3	be ——— been	know ——— ③		2	②	
4	egg ——— eggs	box ——— ④		3	③	
5	we ——— our	who ——— ⑤		4	④	
				5	⑤	

図1　昭和57年度岐阜県高等学校入学試験問題の例

上記の問題のうち，1に注目する．解答欄①に poor という正答ができるために被験者はどんな学習要素を習得していることが必要であろうか．たとえばgood, bad, rich, poor, 4つの語い及びその意味，綴りなどである．いくつかの学習要素すべてを習得していてはじめて正答が得られる．これは高校入試問題であるが，校内での定期試験，そして単元ごとの試験にも同様のことがみられる．つまり，このように現在の評価方法のほとんどはいくつかの学習要素を総括的に測るものである．

このような方法では，学習者の学習状態がどうであり，どこを補充する必要があるのか曖昧

である．さらに，偶然間違えても評価はゼロになってしまうし，また，この問題に正答できなかった者の内でも，poor を全く知らなかった者と知っていたが綴りを間違えた者との間にはかなりの記憶量の差があるのに同じように評価されてしまう．つまり，all or nothing の評価しかできないのである．学習者の英語の習得度を正確に測ることができ，学習者と教授者（カリキュラム開発者も含む）にとって有効な評価方法が開発されなければならない．

2. コンピタンスとは

チョムスキーの考え方によれば，Competence（言語能力）とは文を生成する規則の集合，つまり文法上の能力であり，それは文法によって特徴付けられるものであり，音声と意味に関する表示のレベルを含む種々の表示を導き出す規則の体系からなっている．チョムスキーは文法に重点を置いているが，本論での Competence はもっと広い範囲にわたるものとして考える．具体的には次の6つである．

① 音韻
② 語い
③ 統語規則
④ 語の意味
⑤ 表記法
⑥ 書記法

3. コンピタンスの評価とは

Performance（言語運用）を構成する個々の要素（上述の6つ）を切り離して，別々にその習得の度合いを評価するものである．形成的評価であり，学習者及び授業者（カリキュラム開発者も含む）への具体的なフィードバックの働きをする．

評 価 方 法

1. 4つの原則

開発にあたって次の4つの原則に従った．

(1) SFシステムカリキュラム[1]にそっている．――本論で述べる評価方法は形成的評価であり，学習過程での評価である．多くの英語学習カリキュラムがあり，最終的目標は同じであっても，そこへ到達するまでの過程は異なっている．したがって，形成的評価もカリキュラムごとに異なってくるはずである．我々の知る限りでは，SFシステムカリキュラムが英語習得に最適であると考え，そのカリキュラムを取り上げた．
(2) 誰もが使える．――実施が容易にできるということである．
(3) 測りたい能力を，より少ない量を調べることにより，適切に測れる．
(4) 知能テストのようにくり返し使える．――従来の学習テストは一度実施されると問題と解答をある程度覚えてしまい，二度目の実施の際（同じテストを二度実施することはめったにないことだが）には，一度目の実施の影響が及び，学習結果を正しく測ることができない．

2. 開発の手順

ことばを学ぶとは表現行為，すなわち，口からことばを発して自ら認識した事象を表現でき

るようになることである．したがって，前述のコンピタンスの⑥書記法を除いては，スピーキングテストでコンピタンスを測るのが最も望ましい．しかし，スピーキングテストは非常に大きな手間がかかる．そこで，被験者の反応を実際にスピーキングさせてではなく，間接的に紙の上で測るテスト方法の開発を試みた．そのため，ペーパーテストと並行して同じ内容のスピーキングテストを実施し，両方の結果を比較して，ペーパーテストの結果をスピーキングテストの結果へより近づけるためにペーパーテストを改良した．

テストはまず実験クラス[2)]で実施し，改良を加えた後，ＲＩＬＡ[3)]クラス及びいくつかの中学校で実施し更に改良を加えた．

また，一部を除いてVTR化され，マークシートを用い，テスト結果はコンピューター処理[4)]している．

現在のところ，前述のコンピタンスの②，④，⑤が開発中であるが，まだテスト開発の段階であってフィードバック等には至っていないことをお断りしておきたい．次に６つのコンピタンスのうちの②語い，④語の意味，⑤表記法の評価方法について説明する．

② 語　い

語の音声形体を口から出せる時，習得度100％と考える．

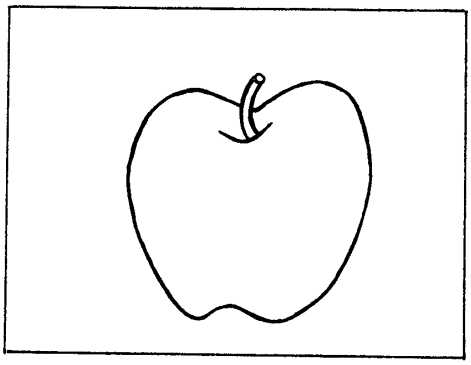
テストは，モニターに絵が提示され，被験者は，その絵の表わす語を４つの選択肢の中から選んで解答用紙にマークする，というものである．選択肢が音声により提示されるものと，文字によりモニター上に提示されるものの２つのテスト形式が開発されている．１つのテスト項目に対する時間配当は，絵の提示３秒，選択肢の提示13秒（これは音声の場合で文字の場合は３秒），解答３秒，である．予備テストを実施し，被験者の反応時間を測定した結果により，これらを決定した．

選択肢の作成方法，つまり誤答の選び方については試行錯誤中であるが，現在までのところ同じカテゴリーの中から選ぶ方法（サンプル１参照）と発音の似かよったものを選ぶ方法（サンプル２参照）が考えられている．後者はより正確な音声形体の習得をねらっていることから，後者の方がより高いコンピタンスを測るテスト方法であると考えられる．

サンプル１，２は，選択肢が文字によりモニター上に提示される問題である．

サンプル１の問題では，果物というカテゴリーの中から誤答を選んである．

サンプル２の問題では，被験者がｌとｒを間違って発音していたり，子音のあとに母音を入れるといった日本語的発音をしている場合には，正答を選ぶことができない．



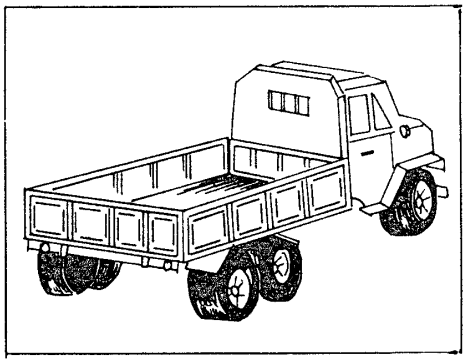
1. apple
2. orange
3. melon
4. banana

Correct response; 1

図２　サンプル１

また，語いの評価は，ＳＦシステムカリキュラムの構成から，名詞，形容詞，他動詞の３つに分かれるが，形容詞と他動詞は名詞と

違って数が限られていることから，次のような語頭の文字のみを提示した形の選択肢を用いた形式のテストも開発された．この方法によると，選択肢が提示される前に絵の表わす語いを想起していなければ，3秒という短い時間内に正答を選ぶことができないため，スピーキングの力をペーパーテストで測るのに有効であると考えられる．（サンプル3参照）

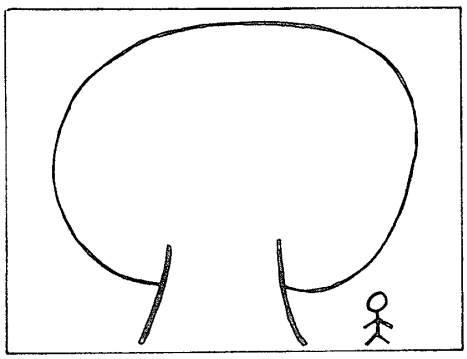


1. toluck
2. truck
3. tluck
4. trucku

Correct response; 2

図3　サンプル2

SFシステムカリキュラムのうち本論の対象とするコンピタンス習得段階のカリキュラム（SFシステムカリキュラムは，コンピタンス習得とパーフォーマンス習得の2段階がある）では，学習する形容詞のうち，bで始まるものは，big と bright と2つであるから，サンプル3の選択肢1を正答とした被験者は，ほぼ頭の中に big を想起していると考えられる．しかし，名詞の場合はbで始まるものは banana, bridge, burdock, buttock, bread, etc, と多くあるため，このテスト形式は名詞の場合は無意味である．他の語頭文字についても同様のことがいえる．



1. b____
2. c____
3. d____
4. s____

Correct response; 1

図4　サンプル3

④　意　　味

語の意味とは，一語多義からなる語義の総体である．その評価は，どれだけの語義を習得しているかを測ることにより，ある語の意味範囲の獲得の度合いをみる．

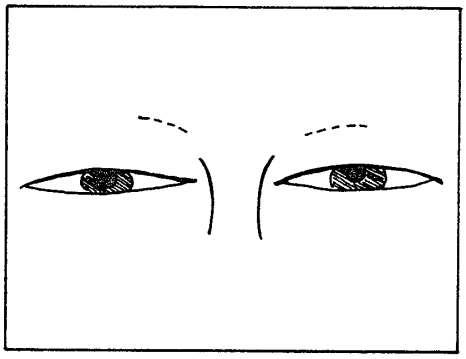
多肢選択問題形式と正誤問題形式の2つが，それぞれ形容詞と動詞で開発された．以下に詳しく説明する．

(1)　多肢選択問題――形容詞

モニターに絵が提示される．次に，4つの選択肢が音声により提示される．その中から，絵に適するものを1つ選ぶ．なお，絵は基本的語義を網羅するよう注意して，各語につき5枚ずつ作成した．（サンプル4参照）

(2)　正誤問題――動詞

初めに，ある動詞の綴りが発音と共に提示される．次に，8ないし12枚の絵がモニターに提



(by voice)

1. 〔 waid 〕
2. 〔 náerou 〕
3. 〔 náelou 〕
4. 〔 θin 〕

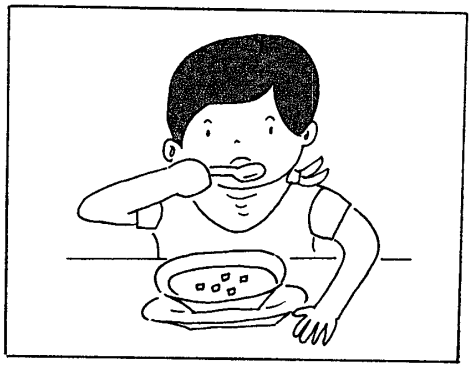
Correct response ; 2

図5　サンプル4

示される．各絵の示す動作が初めに提示された動詞に適するかどうかを判断し，解答用紙にその正誤をマークする．このテストの正答率から，どの程度ある語の意味範囲が獲得されているかを測定する．（サンプル5参照）

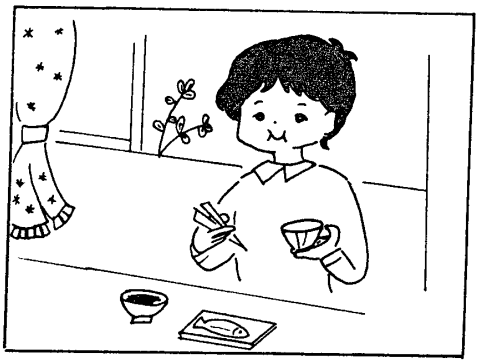
eat : eat している絵なら1，していないなら2を付けよ．

(1)



Correct response ; 1
(eat soup)

(2)



Correct response ; 1

図6　サンプル5

サンプル5の問題では，eat している絵なら1，していないなら2を記入する．

⑤　表記法

英語のスペリングシステムと読み方のシステムとの規則をすべて見つけ出し体系化した学習教材を，SFシステムカリキュラムでは Pronunciation Module（PM）と呼んでいる．表記法の評価は，PMの習得度を測るものである．

評価は2つのレベルに分かれている．第一のレベルは読む以前の文字認知レベルであり，第二のレベルは単語をかたまりとして読む以前の1つないし2つの文字の読み方の規則の習得のレベルである．

(1) 文字認知レベル

新しく学ぶ言語の文字が未知であるとき，声に出して読み始める前に各文字の形が習得されなければならない．この文字を扱う能力は，学習者がいかに速く文字を認知できるかを調べることにより測定できる．具体的には，一定時間内で学習者が正答した項目数により，文字認知の習得度を測定した．（サンプル6参照）

初めの文字と同じものを，後の4つないし5つの中から選んで○をつけよ．
1. s　a k t s
2. b　g d b p a

図7　サンプル6

(2) 文字レベル

（テスト内容）

母　音　字：　5つの短母音字
　　5つの長母音字（語尾にeを伴う）

子　音　字：　21の子音字
　　4つの2重子音字

（テスト方法）

メディア：　VTR

プログラム：　3種類開発されている．1つは音声を用いたもの(ア)で，他の2つは音声を用いないもの(イ)(ウ)である．

(ア) モニターに1つの単語（そのうちの1文字に下線が引いてある）が提示される．次に，4とおりの読み方が音声で与えられる．被験者は頭の中で想起したものと同じ読み方を4つの中から選んで解答する．（サンプル7参照）

bit	(by voice)	1.〔bet〕
		2.〔bɪt〕
		3.〔bit〕
		4.〔bʌt〕

図8　サンプル7

(イ) 正誤形式：2つの単語（各単語のうちの1文字に下線が引いてある）が，モニター上に同時に提示される．2つの下線部の読み方が同じなら○，違うなら×をつける．（サンプル8参照）

サンプル8は，語尾にeを伴う場合，母音の部分を長母音で読むという規則の習得度を測るものである．

(ウ) 多肢選択形式：4つの単語（各単語のうち1文字に下線が引いてある）がモニター上に提示される．下線部の読み方が他の3つとは違うものを1つ選んで，その番号に○をつける．（サンプル9参照）

サンプル9は，cがその後にi，y，eを伴う場合，〔s〕と読むという規則の習得度を測るものである．

pat　pate

Correct response ; X

図9　サンプル8

1. cite
2. cote
3. cate
4. cute

Correct response ; 1

図10　サンプル9

あとがき

以上，コンピタンスの評価とはいかなるものか，そして，これまでに開発されているその評価方法について概述してみた．

しかし，本研究は始まったばかりであり，本論は基本的考え方と研究の方向を示したにすぎず，まだまだ多くの問題点がある．学習カリキュラムにそって学習したものが正しく評価される．そして，言語活動の中心であるスピーキングの力が測れる評価システムの確立が待たれる．

なお，本論は，岐阜大学教育学部英語英文学科英語教育研究室58年度卒業生による卒業研究をまとめたものであり，この研究は，研究室の後輩によりさらに進められている．

注

1) 岐阜大学教育学部英語英文学科藤掛庄市教授の研究室で開発されている独自の英語学習カリキュラム．

2) SFシステムカリキュラム開発のため，そのカリキュラムを試行する小人数のクラス，本論の対象者は，小学校5年生男女6人ずつからなる．

3) Research Institute of Language Arts（ランゲージアーツ総研）内のいわゆる塾のことで，SFシステムカリキュラムによって英語を教えている．

4) 岐阜大学教育学部カリキュラム開発センターで行なっている．

参考文献

1) 藤掛庄市：変革の英語教育 '80s，学文社（1980）

2) 藤掛庄市：「英語の基礎学力と評価」，現代英語教育，2月臨時増刊，130～136，研究社（1980）

3) 松香洋子：英語好きですか，読売新聞社（1982）
4) 長谷川潔：入門期の英語教育，ブリタニカ（1980）
5) 森川美恵子　他：*Development of English Competence Evaluation Method*.（1982），Unpublished.